

令和3年度 兵庫県立農業大学校評価シート

【教育目標】

国際化する農業に対応するとともに、地域社会の多様化等、変化の激しい農業に対応する幅広い知識、高度な農業技術及び経営管理能力を修得させ、地域社会の有為な形成者となる意欲的な農業の担い手と地域農業を牽引する指導者を養成する。

【重点目標】

- I 次代の農業を担う意欲の高い学生の確保
- II 実践的教育の充実・強化による学生の資質向上
- III 就農率の向上に向けた学生指導の充実

【達成度の基準】

- A 目標を上回っている
- B 目標どおり進捗している
- C 目標を下回っている

重点目標：I 次代の農業を担う意欲の高い学生の確保

現 状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	今後の取り組み・課題と改善策	学校評議会委員の意見	達成度
1 40名に対し競争率 1.6倍程度で推移 (受験者数 R1:59名 R2:60名)	農業高校との連携強化	1 就農意欲の高い学生確保のための入試制度改正 2 農業高校の進路担当教諭との連携強化 3 農業高校教員への大学校の認知度向上 【評価指標】 1 農業高校を重視した推薦入試制度の実施 2 農業高校への説明(県下11校) 3 「農業高校教員研修」の開催	1 農業志向が高く優秀な学生の獲得にむけて入試制度を改正した (1) 推薦入試の改正 ①募集枠を明記(7割)、②「農業に関する一般教養問題」を出題、 ③農業改良普及センター意見書廃止、④調査書評定値3.0以上→3.3以上 (2) 県高等学校教育研究会農水産部会(12校)に出席し、農大の教育概要と併せて入試制度改正を説明(2回) (3) 入試結果(合格者数/受験者数) 推薦入試 23名/24名、一般(前期)1名/3名、一般(後期)4名/4名、 ※農業高校出身者 19名/19名 2 高校進路担当教諭との連携強化 (1) 12月、農業高校11校及び普通科高校6校を個別訪問(PR及び受験案内) 3 県教育研修所と連携し農業高校教員研修を初めて開催(11/11)し、6校から11名の若手教員が参加	1 少子環境下での受験者数の増加 (1) 入試関係情報提供の前倒し 7月→5月 (2) ホームページでタイムリーな入試情報発信 (3) 農大の特色PRの強化 特色:実践学習、資格取得、農家等派遣実習、インターンシップ、4年生大学編入学 2 農大オープンデー(学生、教員の見学会)の開催	【A 取組に対する意見・評価】 (1) 推薦入試の改革、初めて農業高校教員研修を開催し教員との連携強化を図った事は評価 (2) 情報提供の前倒しにより、受験意欲の早期喚起を期待する 【B 提言】 (2) 農業高校教職員との連携は、互いの目標・目的を明確にするとともに認識を一つにしてさらに充実を (3) 今後の取組の効果を検証しながら必要に応じて改善策の検討を	B
2 入学者は34.6名 定員充足率は87.5% (H29~R3平均) 3 農業高校の出身者 59.8% (H29~R3平均) 4 推薦入試入学者 62.9% (H29~R3平均) 5 オープンキャンパス参加者71.6名 (H28~R2平均、募集80名) うち農大進学希望者は67%(アンケート結果)	農業大学校のPR	1 高校主催の進路ガイダンスでのPR(R2:10校) 2 学生募集要項、ポスター、学校案内等の作成・配布 配布先:県下高校242校、市町・JA、県機関等 【評価指標】 1 進路ガイダンス 10校以上 2 アドミッションポリシー(学生受入方針)掲載の学生募集要綱の配布	1 進路ガイダンス等で大学校のPR (1) 進路ガイダンスに出席:播磨農*3回・県農2回・上郡2回・佐用*2回・氷上*・伊川谷・三木北の延べ12高校、そのうち*には各校卒業の農大生も出席 (2) 高校進路相談会(3/17加古川)での説明 (3) 農大での見学・体験会(3/24 県立篠山東雲高校を受け入れ) 2 学生募集要項、ポスター、学校案内等を作成・配布 (1) 4年度学生募集要項にアドミッションポリシーを掲載し、県下高校242校、市町・JA、県機関等に配布(7月) (2) 県立高校137校に大学校PR資料を配布(12月)	1 普通科高校の進路ガイダンス強化 2 入試関係情報提供の前倒し(再掲)	【A 取組に対する意見・評価】 (1) 目標を上回る数の高校への進路ガイダンス実施等は評価 【B 提言】 (3) 他校での生徒数の激減も非常に大きいので、PR活動は積極的に行う必要がある (4) 普通科から進学する生徒もいるので、農大がどんな所か、どんな事ができるかをもっと情報発信して欲しい	A
	ホームページによる情報発信の強化	1 トピックス情報の積極的な発信(R2:月平均1.7回) 2 SNSによる情報発信を検討 【評価指標】 1 トピックス発信 月3回以上 2 YouTube、Facebookの配信	1 ホームページ情報発信の充実 (1) トピックス情報 4月~2月 計35回(月平均3.5回) (2) 農大生の声(農業高校外出身学生の座談会)、入試過去問題等を掲載 2 YouTube、Facebookの配信を開始し、ホームページにリンク	1 トピックスの定期的配信 専攻毎に輪番、学生が卒論等について情報発信等の工夫	【B 提言】 (1) HPの充実・更新頻度アップ ・実習等で行ったことなどをこまめに発信 ・農大で学べる事、卒業生の進路就職状況の紹介 (2) 説明会で農大動画を紹介し、QRコードを示し高校生にその場で見てもらう	B
	オープンキャンパス、個別見学会等でのPR	1 コロナ禍における対策を施した開催(8月) 2 学生自治会による専攻、クラブ活動の紹介 【評価指標】 1 参加者 募集定員95%以上 2 大学校への進学希望者70%以上(アンケート)	1 コロナ禍の8月4日、19日の2回、各参加者を30名に縮小し開催(前年40名) (1) 19日はまん延防止等重点措置の対象地域となり、食堂体験中止、開催時間の短縮、オンライン中継等に対応 (2) 2回の参加者56名(定員の93%) 2 学生自治会の説明者数を絞りながら、専攻、クラブ活動を紹介 参加者アンケートで農大進学希望割合 1回目79%、2回目68%、平均73% 3 個別見学会受け入れ 8組	1 農大オープンデー(学生、教員の見学会)の開催(再掲)	【A 取組に対する意見・評価】 (1) コロナで制限があるなか、参加者を確保し、学校のPR、学生の確保に努力したことは評価	A

重点目標：Ⅱ 実践的教育の充実・強化による学生の資質向上

現 状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	次年度の課題と改善策	学校評議会委員の意見	達成度																																																							
1 講義に対して実習が1.2倍と、実践的教育を重視 2 連携協定企業のGAP、農福連携の取組を学ぶ等、カリキュラム改善に取り組んでいる 3 資格取得を推進しているが、合格率の低い資格がある 日本農業技術検定2級(農大卒業程度): R2 合格率20%	知識・技術に関するカリキュラムの強化	1 営農管理支援ソフトによる学生と指導職員間のデータの共有及び蓄積データの活用(農産園芸課程) 2 高度な飼養管理技術の習得(畜産課程) 3 農産加工における衛生管理への理解促進 【評価指標】 1 営農支援システムへの理解促進とデータ活用 2 超音波診断・削蹄実習等の実施 3 HACCPの管理点の理解	1 野菜専攻では、営農支援ソフト「アグリノート」を活用し、作業工程及び生育状況を情報共有する取り組みを実施 2 (1) 全ての畜産専攻学生がロープワーク、体測定、機械運転等を習得できるように取り組み、令和2年度に導入した削蹄枠場で削蹄実習を実施 (2) 1年1産を目標に、繁殖牛の体重及びボディコンディションスコア測定等を実践 (3) 血中ビタミンA測定・コントロールを実施し、数値に基づいた飼養管理を実践 (4) 超音波診断装置を用いたより高度な家畜人工授精実習を実施 (5) 但馬牛経営への参画意欲醸成に向け、①日本農業遺産認定に係る振興策、②美方地域生産者との交流、③兵庫県畜産共進会への出品、全日本和牛能力共進会出品候補牛の飼養、各種枝肉共励会への出品 を実施 3 調理実習でHACCPの考え方や一般衛生管理を学び、食品の衛生的な取り扱いを習得(イチゴジャム、トマトケチャップを商品化)	1 学生参画のもと専攻実習に関する目標設定・活動計画及び評価反省の実践 2 削蹄師の指導で削蹄技術の向上及び機械削蹄技術の向上	【A 取組に対する意見・評価】 (1)カリキュラムの充実強化、資格の取得、スマート農業に関すること等かなり充実されている (2)講義に対して実習が1.2倍は貴重な実践体験であり、これを繰り返し行うことが資質向上につながる 【B 提言】 (3)学生に農大で何をしようとしているのかを常に認識させることが重要 (4)特に、農業を取巻く情勢は、学生自らが積極的に収集しなければ得られない。授業の中でこれを伝え、学生自身が農業に関わる意義や使命を考えるきっかけとして欲しい (5)経営感覚を養う講義の工夫	A																																																							
4 スマート農業の教育強化のため、環境制御装置、GPS付農機具、畜産遠隔管理装置等を導入 5 学生自治会が主体となり、コロナ禍での規律ある寄宿舎生活を実践	資格取得の促進	1 進路を見据えた資格取得の奨励 2 日本農業技術検定(2級)の早期取得支援カリキュラムの見直し(1年次での栽培各論の修得) 【評価指標】 1 特に取得推進する資格 ①大型特殊免許(農耕用):全員 ②家畜人工授精師:全員 ③農業機械士:合格率60%(R2 合格率36%) 2 日本農業技術検定2級 合格率40%	1 令和3年度資格取得状況 <table border="1"> <thead> <tr> <th>資格・免許の種類</th> <th>受験(受講)者</th> <th>取得(合格)者</th> <th>合格率</th> <th>備考(全体取得状況)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>大型特殊自動車(農耕用限定)運転免許</td> <td>37</td> <td>36</td> <td>97%</td> <td>2年生100%取得</td> </tr> <tr> <td>刈り払い機取り扱い作業安全衛生教育</td> <td>32</td> <td>32</td> <td>100%</td> <td>1年生100%取得</td> </tr> <tr> <td>小型車両系建設機特別教育</td> <td>35</td> <td>35</td> <td>100%</td> <td>隔年開催</td> </tr> <tr> <td>けん引免許(農耕車限定)</td> <td>1</td> <td>1</td> <td>100%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>家畜人工授精師養成講習会</td> <td>13</td> <td>13</td> <td>100%</td> <td>畜産専攻14/16</td> </tr> <tr> <td>指導農業機械士</td> <td>5</td> <td>2</td> <td>40%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>農業機械士</td> <td>45</td> <td>23</td> <td>51%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>危険物取扱者</td> <td>5</td> <td>2</td> <td>40%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>日本農業技術検定 2級</td> <td>34</td> <td>10</td> <td>29%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>" 3級</td> <td>27</td> <td>26</td> <td>96%</td> <td></td> </tr> </tbody> </table> 2 1年生で栽培各論Ⅰ～Ⅲを修得する(改正前は各論Ⅰのみを1年生で修得)ようにし、日本農業技術検定2級の早期合格を図った	資格・免許の種類	受験(受講)者	取得(合格)者	合格率	備考(全体取得状況)	大型特殊自動車(農耕用限定)運転免許	37	36	97%	2年生100%取得	刈り払い機取り扱い作業安全衛生教育	32	32	100%	1年生100%取得	小型車両系建設機特別教育	35	35	100%	隔年開催	けん引免許(農耕車限定)	1	1	100%		家畜人工授精師養成講習会	13	13	100%	畜産専攻14/16	指導農業機械士	5	2	40%		農業機械士	45	23	51%		危険物取扱者	5	2	40%		日本農業技術検定 2級	34	10	29%		" 3級	27	26	96%		1 農業機械士及び日本農業技術検定2級の合格率向上にむけた継続的な支援	【A 取組に対する意見・評価】 (1)資格取得の推進で日本農業検定については、合格率が低迷している感あり (2)けん引免許、危険物取扱者の受験者がもっと増えて欲しい 【B 提言】 (3)地域を担う認定農業者・農業法人・集落営農組織等で効果的に活用できるスマート農業技術の習得導入を検討して欲しい	B
資格・免許の種類	受験(受講)者	取得(合格)者	合格率	備考(全体取得状況)																																																									
大型特殊自動車(農耕用限定)運転免許	37	36	97%	2年生100%取得																																																									
刈り払い機取り扱い作業安全衛生教育	32	32	100%	1年生100%取得																																																									
小型車両系建設機特別教育	35	35	100%	隔年開催																																																									
けん引免許(農耕車限定)	1	1	100%																																																										
家畜人工授精師養成講習会	13	13	100%	畜産専攻14/16																																																									
指導農業機械士	5	2	40%																																																										
農業機械士	45	23	51%																																																										
危険物取扱者	5	2	40%																																																										
日本農業技術検定 2級	34	10	29%																																																										
" 3級	27	26	96%																																																										
スマート農業に関するカリキュラム拡充	1 花きにおける施設内複合環境制御による作型拡大 2 圃場管理自動化、ドローンセンシング、GPS等のカリキュラム実施 【評価指標】 1 環境制御技術の習得 カーネーション夜間冷房作型の導入 2 ICT対応カリキュラムの実施	1 夜間終夜冷房のカーネーションの品質・開花時期に与える影響を卒論で研究 (1)淡路農業技術センターで研修するなど試験研究とも連携した (2)作型の前進効果を実証できたが、低コスト化が課題 2 ICT対応カリキュラムの実施 (1)1年生対象にドローン操作基礎研修、2年生の農産園芸課程学生にドローンセンシング活用技術について県内で実績がある企業による講義を実施 (2)作物専攻で、GPS付トラクターや田植機による実習、大規模営農組織で自動ほ場水位管理システム調査研究を実施した	1 花きの低コスト環境制御技術としてEOD冷房技術の実証 2 野菜でのリアルタイム環境モニタリング 3 肉牛の繁殖等に関するセンサーによるデータ管理の習得 4 ドローンパイロット資格取得に向けた知識・技術の習得	【B 提言】 (1)スマート農業の実践カリキュラムは、農大だけで背負うのではなく、例えば卒業生などの先進農家の協力を得てはどうか	B																																																								
学生の主体性・規律性の向上	1 学生自治会を主体とした規律ある寄宿舎生活の実践 2 収穫祭など学校行事の企画・運営の支援 【評価指標】 1 新型コロナウイルス対策のルール遵守 2 収穫祭、県民農林漁業祭等での自主企画活動	1 コロナ禍のもと寄宿舎での感染防止対策を徹底するため、自治会でルールを設定し、規律ある寄宿舎生活を実践 内容:マスク、共同スペースの利用(3密対策)、食堂ローテーション利用、規則違反者に対する自主的ルール等 2 収穫祭、県民農林漁業祭等での自主企画活動 (1)県民農林漁業祭では、学生がコロナ対策のため販売ブースでの接客動線を工夫 (2)収穫祭は、学生実行委員会を立ち上げ、コロナ感染対策を踏まえた実施までこぎつけたが、直前に農大での実施を見送り(県下で発生した鳥インフルエンザのため)、県立三木山森林公園に会場を移し、1日のみ開催した (3)新聞社への働きかけと記事掲載の効果で、盛況に終えた	1 コロナ対策を徹底した規律ある寄宿舎生活の実践 2 収穫祭のノウハウ伝授 2年連続で規模縮小(模擬店無し)での開催となり、学生自治会主体による運営等のノウハウ伝承が課題	【A 取組に対する意見・評価】 (1)学生自治会を主体とした規律ある学生生活・行事運営が行われている (2)寄宿舎生活のため、特にコロナ発生を心配しているが、学生達も職員もよくやっている	A																																																								

重点目標：Ⅲ 就農率の向上に向けた学生指導の充実

現 状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	次年度の課題と改善策	学校評議会委員の意見	達成度
1 農家出身学生は25% 自営就農率は4% (H28～R2 度平均) 2 農業法人等への雇用就農は33% 自営就農とあわせた就農率は37% (H28～R2 度平均) 3 東海近畿ブロック農業大学校平均就農率49.4%に比べると低い (H29～R元度平均) 4 JA、農業関連産業(農機具、種苗等)等をあわせた農業に関わる進路選択者は93.5% (H28～R2 度平均) 5 農業・農村への早期理解促進のため、農家等派遣実習を1学年に移行し、R2年度は1・2年各20日間ずつ実施 6 雇用就農した卒業生の動向把握が不十分	学生個々の意向把握及び就農活動支援	1 個別の進路意向の把握及び進路決定後の継続的支援 2 雇用就農先とのマッチング支援 3 施策・制度資金等を活用した就農活動支援 【評価指標】 1・2 就農率目標 50% 進路決定率100% 3 農業次世代人材投資資金(準備型)の活用	1 個別の進路意向の把握及び進路決定後の継続的支援 (1) 2年生39名は、個人面談(5月)で意向確認、インターンシップやマッチング支援を実施 (2) 毎月、職員会議で学生個々の進路指導を検討し、支援を実施 (3) 結果：進路内定者100% 就農21/39(53.8%)、うち親元就農3、進学1 (4) 1年生は個別面談(2月)で進路意向を把握後、進路指導を本格化する。 2 県内の4農業法人・農園等への個別マッチング、就農希望者向けセミナー(6/19)、農業法人の仕事説明会(6/25・12/21)等のセミナーを斡旋 3 農業次世代人材投資資金(準備型)では、2年生3名が就農計画作成、1名は雇用就農、1年生は2名が新規申請(申請では保護者面接等で就農意思を確認)	1 学生の意向把握と早期のマッチング支援 2 農業改良普及センターと連携し、計画的に就農支援	【A 取組に対する意見・評価】 (1) 学生の就農意欲の喚起に努めたこと等により、目標を上回る就農率が確保できたことは評価 【B 提言】 (2) 今後は、年齢の近い卒業生から直接生活の様子を聴き取る機会を増やすなどにより、さらなる就農意欲喚起が期待できないか	A
	農家等派遣実習の1年次実施	1 実習の円滑な実施のための実習態度の醸成 2 学生と受入れ農家のマッチング実施 【評価指標】 1・2 農家等派遣実習単位取得 1年生全員(35名)	1 1年生対象者34名が、10/6～10/22(17日間)で実施 当初予定8/26～10/4(40日間)が、緊急事態宣言により延期となり、受け入れ農家及び関係機関との調整を図り、期間を17日間に短縮して実施。実習前に全員がPCR検査、行動記録チェック、実習時にはコロナ対策を徹底した 2 学生と受入れ農家のマッチング実施 (1) 農業改良普及センターを介して調査した受け入れ農家の条件と学生の意向をマッチングした (2) 11月10日に報告会を開催し、受け入れ農家及び農業改良普及センター参加のもと学生が実習成果をプレゼンした	1 1年生の40日間での本格実施を踏まえ、就農率向上を図る		B
	インターンシップ等による雇用就農支援	1 雇用就農先とのマッチング促進 2 インターンシップ等への参加を促進 【評価指標】 1 インターンシップ実施学生 R2：13名→R3：20名 2 新たなインターンシップ支援制度の検討	1 県内の4農業法人・農園等でマッチング支援 2 インターンシップ等への参加促進 (1) (公社)ひょうご農林機構の「ひょうごの農トライアル事業」を活用してインターンシップを実施(5名) (2) 農業教育高度化事業(国庫事業)で農大独自のインターンシップ制度を創設、7名が18日間実施した(R4.1月から) (3) 同窓会と調整し、インターンシップや雇用就農者を支援する「農業大学校創立100周年記念基金事業」を創設	1 農家等派遣実習に引き続いて現場実習の機会を継続させるため、インターンシップを推進	【A 取組に対する意見・評価】 (1) 国庫事業の活用のほか、同窓会と調整した基金事業の創設は評価 (2) インターンシップ実施学生が増加しているのは良い 【B 提言】 (3) 雇用就農等に対応するため、県内で活躍する農大OBへのインターンシップなどにより、農業者と接する機会の創出と農大OBネットワークを活用した就農活動の充実拡大の継続を	A
	就農意欲を向上させるカリキュラムの充実	1 農業参入企業等との連携によるカリキュラム実施 2 雇用就農者や雇用就農後に独立した農業者の事例研究 【評価指標】 1 農業法人派遣実習、県下市町が実施する就農支援事業への参加 2 「現代実践農業」、「農政時事」等での農業者による講演	1 参入企業：イオンアグリ創造(株)社長講演及び現地研修(三木市)、農業法人派遣実習(1年、34名)10/26～28を実施 2 (1) 農業者：「農政時事」で県内農業法人の代表者4名が講演 (2) 6/24 農業技術交流会で専門別分科会を開催し、県下の若手農業者と意見交換 (3) 「現代実践農業」では7名の農業者から実践事例を聴講 (4) 農大実践研修生との交流、実習作業の連携	1 新たなカリキュラムの検討	【A 取組に対する意見・評価】 (1) 県内の企業や第一線で活躍する農業者から直接講義を受け、意見交換できるよう工夫が見られる 【B 提言】 (3) 先進企業だけでなく、耕作以外の手段で農業に関与している企業等との交流や、逆に企業への知識・技術提供なども、よい刺激になるのでは	A
	雇用就農者のフォローアップ	1 雇用就農者の動向の確認及び支援の意向把握 2 自営就農志向者等を対象とするキャリアアップ支援検討 【評価指標】 1 現状調査の実施 2 自営就農志向者のニーズ把握及び支援策を検討	1 平成26～30年度卒業で親元就農、独立就農、雇用就農した65名に、就農状況等の確認と今後の意向についてアンケート調査を実施した(回答者36名) (1) 現状について：卒業時と同じ19(53%)、違う17(47%)で卒業後5年目を境に就農状況が変わり、雇用就農から親元就農、独立就農に移っており、就農定着率は92% (2) 今後の意向：農業での就農継続を希望し、内3名が独立就農を志向 2 上記結果を踏まえ、就農支援センター等と情報共有し支援するとともに、令和4年度リカレント農業教育(就農チャレンジ研修等)で独立自営希望者を支援する	1 リカレント農業教育での支援	【A 取組に対する意見・評価】 (1) 既卒者の現状を初めて調査・確認したことは評価 (2) 独立就農希望者等に対し、就農支援センター等と連携したフォローにより、独立等の実現が図れることを期待 【B 提言】 (3) 上記の取組自体が、農大の特徴・魅力向上の1つにもなり、受験希望者の確保にも資するものとする	A